

## 北朝鮮・モンゴル・韓国、国境を越える 女性たちのネットワーク2005

いまおか りょうこ  
今岡 良子

### (1) 2005年、2度ソウルを訪ねて

モンゴルでは2000年の雪害をきっかけに、遊牧民が首都に、首都の住民は国外に移住する流れが加速した。私の専門は遊牧地域論であるが、首都移住に至った遊牧民のライフヒストリーの聞き取りを2003年から始めたところである。ソウルは、国外移住を考えるモンゴル人にとって最も身近な都市で、親戚の誰か必ず1人が出稼ぎに出ている。そこには「モンゴル・タウン」があり、2万人のモンゴル人のコミュニティの中心があるという。そう聞いていたので、一度、訪ねてみたいと思っていた。

2005年6月、世界女性大会のパネルの一員として、ソウルを訪問し、世界の様々な国と地域から参加した女性の発言に様々な刺激を受けた。そのパネルの合間を縫うようにして、モンゴル人を探し、東大門運動場の「モンゴル・タウン」、新堂のあるモンゴル人家庭、クワンナルの在韓モンゴル人学校・モンゴル文化センター、ヨクサンの仮設礼拝堂、モンゴル人女性が働いていたタンゴケの米軍基地のNGOトゥレバン、アンサンの教会とモンゴル食堂を訪ねた。

同年9月、モンゴルからの帰りに、再び1週間ソウルに滞在した。東大門運動場を拠点に、「モンゴル・タウン」の移住労働者NGO、シンドリムの福音派教会と信者たち・契約労働者・不法滞在者たち、四佳亭では韓国人男性と結婚したモンゴル人妻達のNGOと交流することができた。移住労働者の問題を陳情するNGOに付き添って、在韓モンゴル大使館を訪ね、移住労働者に対する公式見解を聞くこともできた。

この2回のソウル訪問で、モンゴルだけを見ていたのでは、モンゴルを把握したことにはならないと痛感した。不法滞在者は、「朝鮮日報」によると、2003年「7月末を基準に国内に不法滞在している外国人はあわせて30万5567人。国別には、中国15万3910人、バングラデシュ1万7427人、モンゴル1万3242人、その他8万1430人」<sup>2</sup>で、モンゴルは3位に入っている。また、「仁川空港で行方くらました外国人、3年間97人」<sup>3</sup>の内、モンゴル人が55人と最も多い。Zオットゴンの計算によると、ソウルのモンゴル人2万人が1年間に送金する総額は1億2000万ドルである<sup>4</sup>。2004年の選挙では立候補者はソウルに来て、ウランバートルの親族に投票するよう説いて回ったという。ソウルの2万人が養うモンゴル人は大きな票田となる。このように、モンゴルと韓国の間で生まれているヒト・モノ・カネの流れは、予想をはるかに越えたものであった。今後もソウルをモンゴル研究の拠点として訪ね

1 この2度のソウルでのフィールドワークは、藤目ゆき代表、平成16年度科学研究費補助金(基盤)研究(A)(2)、「アジア現代女性史の研究：北東および東南アジアにおける軍事主義とジェンダー」によって実現したものである。

2 2003/07/30付 「朝鮮日報」

3 2005/10/07付 「朝鮮日報」

4 Цар үеийн мэдээ (2005.8), ソウル

続けたいと思う。

さて、この報告では、6月の世界女性大会に関連し、女性のネットワークに関連した話題をいくつか取り上げたいと思う。特に、また、通訳として2度同行した玄理英は、「韓国におけるモンゴル人移住労働者の現状」というテーマで卒業論文をまとめ、「モンゴル研究」23号に掲載する予定である。

(2) パネルの報告より「北朝鮮から中国への人身売買」

まず、世界女性大会のパネルの報告を1つ紹介しよう。6月21日、Trafficking in Mainland Chinese Women to Taiwan (P2104) というパネルで、北朝鮮から中国への人身売買の報告があったので、興味をもって参加した。

表1 パネルリストたち

Yoon Bang-Soon	Organizer
Chun Bok-hee	North Korean Women Defectors in China: Sex-Trafficking and Human Rights Issues
Quy Thi Le	Trafficking in Women and Children in Vietnam: Situations and Solutions
Tran Han Giang	Trafficking in Women and Children in Vietnam: Patterns and Regulative Policies
Jia-Ling Han	Maids or Wife: Mainland China Brides in Taiwan

特に、北朝鮮から中国への人身売買について報告したChun Bok-hee の ‘North Korean Women Defectors in China: Sex-Trafficking and Human Rights Issues’ が興味深かった。配布物がなかったので、パワーポイントで紹介された内容の一部をここに書いておきたい。

北朝鮮から中国への人身売買の数は、10,000-30,000人(ROK Ministry Unification data 1998)、NGOの報告によれば、300,000人であるという。

性別は70%が女性。年齢別に見ると、女性は20-40才の60-70%、20代の61.4%、30代の25.2%、40代の10.9%を占める。

被害者の出身地:70%以上の人々が北西部の咸鏡出身で、1998年から2003年には77.6%を占める。

被害者が送られる場所:中国東北部旧満州地域、吉林省、遼寧省、黒竜江省、日本植民地時代に性売買が行われたところ

プッシュ要因:食糧危機、経済格差、女性に対する雇用差別

プル要因:中国における性産業の成長、結婚市場、中国における花嫁不足

Sextraffickingの形態:組織的な性売買と個人間の性売買

ここでまず、脱北者の数ではなく、人身売買の被害者の数が「10,000-30,000人」あるいは、「30万人が北朝鮮から中国東北部に人身売買されている」ということに驚いた。しかも、日本の植民地時代の性売買地域がその被害者の行き先になっている報告に胸がつまる思いがした。

また、Chun Bok-heeは、加害者の主語として“Chinese”という言葉を使ったが、この地域はモンゴル族をはじめ、少数民族の多い地域である。少数民族の中には、漢族社会の中でエリートとなり、一定の富を築いた人もいる。買う側の“Chinese”はいったいどういう人なのか、北朝鮮と中国(内モンゴル)の接点の地に行ってみたいと思った。

### (3) 脱北者の「モンゴルルート」

このパネルをきっかけに、まだ韓国語初心者の筆者は、日本語で読める「朝鮮日報」、「中央日報」、「東亜日報」のウェブサイトを頻繁に見るようになった。「朝鮮日報」のウェブサイトで、2001年3月1日から今日までの期間の記事を「モンゴル」をキーワードに探してみると、モンゴルから飛んでくる黄砂や渡り鳥のことやモンゴルにおける韓流事情まで、様々な記事が現れる。ここで、北朝鮮の脱北者がモンゴル経由で韓国へ向かう記事に絞ると30もある。その内、中国内モンゴル自治区からモンゴルへ脱北の成功が8、脱北の不成功12、韓国人牧師が脱北にかかわった事例が2つ掲載されていた。今の筆者には記事の信憑性を問う力がないので、事実と受け止めて紹介することにする。

#### ① 「モンゴルルート」とは

脱北の「モンゴルルート」は、日本ではあまり知られていないが、1999年から韓国人牧師による開拓が始まったという記事がある。

「脱北者 500 人の命を救った「モンゴルルート」の開拓者」 「朝鮮日報」2003/02/23

申牧師は脱北者の間で「モンゴルルートの開拓者」と呼ばれている。中国内の脱北者をモンゴルの避難所に移住させ、生活の場を設けてあげ、再度韓国へと送り込む仕事を3年前から行っているためだ。彼の開拓した「ルート」を経た脱北者だけで500人あまり。この過程で彼は2000年末、脱北者7人と一緒にモンゴル国境守備隊に捕まり、1週間監禁されたこともある。「危険なことも数多かったですね。99年には「モンゴルルート」を作るため、国境地方を踏査したのですが、雪で凍りついた道で車が滑り、崖から転げ落ちたこともありました。それでも、車に乗っていた3人も、まったく怪我をしなかった。神様が助けて下さっているとしか、考えようがありませんね。」

モンゴルの「ノツトイ・メデー」紙（2006年1月11日気付）には、「モンゴルを通して韓国へ亡命する北朝鮮人は2000人を越える。」と記されている。

#### ② 中国国境での脱北阻止

モンゴル政府は脱北者が希望の目的地に行くことを認めている。脱北者にとっては、モンゴル・中国国境をどう越えるかが、大きな問題となる。国境手前で中国公安に脱北を阻止されたのが次のケースである。

「脱北者ら11人が中国公安に逮捕」 「朝鮮日報」2003/08/12

脱北者10人と彼らの韓国行きを案内していた朝鮮族1人の11人が8月3日、中国北部の内モンゴル自治区のエレンホト市付近で中国公安に逮捕されたと、在中脱北者支援活動を行っているトゥリハナ宣教会側が12日明らかにした。

エレンホトとは、シベリア鉄道の中国側の国境の町である。

「中国、脱北者1人を射殺」 「朝鮮日報」2004/04/13

中国に滞在していた脱北住民 24 人が今月2日、内モンゴル地域で国境を越え、モンゴルに脱出する過程で、1人が中国軍の発砲で死亡し、17人は現場で逮捕され、調査を受けている。また、残り6人は現在行方が分からない状態だと、トゥリハナ宣教会関係者は明らかにした。中国軍に逮捕された17人は、ほとんどが女性で、この中には妊娠6カ月の妊婦、2歳の子どもなどが含まれており、臨時収容所でハストをしながらか国行きを主張しているという。

次の記事記も、トゥリハナ宣教会の記者会見の内容である。

拉北者団体「国軍捕虜の孫2人が中国で拘束」 「朝鮮日報」2004/12/13

拉北者家族の会は13日、「北朝鮮で死亡した国軍捕虜の孫2人がモンゴル国境を越えようとして中国の国境警備隊に拘束され、北送の危機に直面している」と主張した。同団体によると、国軍捕虜だったハン某(昨年3月死亡)さんの内孫(10)と、キム某(90年死亡)さんの外孫(11)の2人が先月18日、ほかの脱北者7人と共に延吉市を出発し、モンゴルに向かう途中、国境線の約20キロ手前で行方不明になったという。

### ③モンゴル国境でのゴビ砂漠越え

無事に中国国境を越えても、ゴビ砂漠を越えるルートをとると、死の危険が待っている。

「ある脱北少年の死...」 「朝鮮日報」2001/07/09

トゥリハナの関係者は「チョルミン君が他の北朝鮮脱出者4人と一緒に中国とモンゴルの国境を越えている最中、砂漠で道に迷って30時間余り歩いて力尽き、倒れて死亡したという連絡を受けた」

「身元不明」ユン・ウンジュさんがモンゴルで韓国行き要請 「朝鮮日報」2004/07/12

同団体の関係者はまた、「ユンさんは今年6月14日にもモンゴルへの越境を試みましたが、砂漠で食糧が底をつき途中であきらめた」とした。

筆者のフィールドはゴビ砂漠であるが、車2台で、しかも地元をよく知る運転手といっしょでなければ、危険がつきまとうことを知っている。モンゴル人の現地サポートがなければ、ゴビ砂漠の国境越えは不可能であろうと思われる。

モンゴルの「ノットイ・メデー」紙(2006年1月11日気付)には、モンゴルルートで「脱北を成功させたのは3人に1人の確率で、非常に危険なルートである。」「しかし、モンゴルにたどりつけば、90%の確立で亡命が可能である。」と述べている。

### ④モンゴル国から韓国へ

一方、モンゴル経由で韓国に入ることができたのが、次のケースである。

「脱北者の朴イルファンさんが高麗大学法学部に合格」 「朝鮮日報」 2002/12/27

朴さんの北朝鮮脱出と韓国定着の過程は苦難と逆境の連続だった。なんとか国境を越え、中国の地を踏んだが、監視が厳しい上に、韓国行きを助けてくれる人を見つけることができず、1年間、さまよい歩いた末、モンゴルにまで渡った。朴さんはモンゴルで米国人の宣教師のポール・スワチュンドルバー(61)さん夫婦と知り合い、養父母の縁を結んだ。そして、この夫婦の助けを受け、昨年3月に韓国に無事到着した。

「脱北者“モーゼおじさん”ソウルで息子と6年ぶり再会」 「朝鮮日報」 2005/09/09

昨年11月、中国の延吉を出発し、97日間の長い旅の末、今年2月入国した通称「モーゼおじさん」(52)は先日、息子と劇的な再会を果たした。軍人だったモーゼおじさんは99年9月、中国の長春で韓国の牧師たちと生活していたところを摘発され、北朝鮮保衛部に捕まって家族が離れ離れになった。息子はこのときから青島、内モンゴル自治区、延吉などをさまよい、「コッチェビ(浮浪児)」になって、ありとあらゆる苦労を経験した。モーゼおじさんの妻が先に韓国入り、息子は父より遅れた今年4月、モンゴルを通じて入国した。

「拷問で両足切断された女性 ついに脱北成功」 「朝鮮日報」 2005/09/21

脱北した罪で北朝鮮保衛部の拷問を受け、両足を失った女性が最近、長い道程を経てタイに到着し、韓国行きを待っていることが20日、確認された。パクさんが初めて脱北を図ったのは2000年秋だった。パクさんは、息子と一緒に中国・吉林省の長春に渡り、2003年12月、パクさんが働いていた食堂に息子を預け、内モンゴル自治区の満州里に向かった。内モンゴル自治区満州里は、脱北者たちがモンゴル国境を越えるために主に利用するルートの一つだ。しかし、パクさんは中国公安に捕まり、昨年1月に北朝鮮に連れ戻された。1か月ぶりに釈放されたパクさんは2004年9月、再び脱北した。パクさん親子は6月、内モンゴル自治区満州里からモンゴル行き汽車に乗るために長春を出発した。しかし、5月からの取り締まり強化で中国内の脱北支援団体が大量に摘発され、パクさん親子の脱北を支援することになっていた支援団体も中国公安に逮捕されたことで、脱出計画は頓挫した。

この後、パクさんはミャンマー、ラオス、タイから韓国入りを待つことになった。

これらの記事では、中国在住のトゥリハナ宣教会、拉北者家族の会、米国人の宣教師、NGO「被拉脱北人権連帯」、日本のNGOなどの善意の組織が脱北者を支援していることがわかる。モンゴルの「ノツトイ・メデー」紙(2006年1月11日気付)には、香港などの暴力団関係者が韓国の親族から依頼を受けて延吉を訪ね、国境越えの付き添いをする」と書かれている。

脱北者がまずたどりつくところは内モンゴル自治区であるが、モンゴル族はかかわっていないのだろうか。また、モンゴル国で受け入れる組織は、在モ韓国人であろうか、在モ朝鮮人であろうか。それとも、モンゴル国のキリスト教関係のモンゴル人であろうか。これらの記事からはわからない。

モンゴルの「ノツトイ・メデー」紙には、「韓国へ行くモンゴル人の5人に1人は北朝鮮からの脱北者である。」と述べている。前述の「モンゴルにたどりつけば、90%の確立で亡命が可能である。」とあわせて考えると、脱北者はモンゴル人のパスポートで韓国へ出国するケースが多いのではないかとすると、やはりモンゴルの非合法組織がかかわっているということであろう。

5 「ノツトイ・メデー」2006年1月11日

#### (4) 「人身売買・モンゴルルート」

モンゴルルートで、中国国境をようやく越え、モンゴルに到着したところ、人身売買の被害者になったというのが次ぎのケースである。

「一部の脱北女性が性搾取被害」 2005/04/04

北朝鮮担当の特別報告者、ピット・マンターポーン氏は4日、「韓国行きのためモンゴルに密入国した一部の脱北女性が人身売買組織に引き渡され、性搾取にあった事例があった」と明らかにした。同氏はこの日、ラジオ・フリー・アジアとのインタビューで、「現地(モンゴル)で脱北者10人余と面談した結果、人身売買組織に引き渡され、性搾取にあった事例もあった」と述べた。また、「脱北者たちはモンゴル入国斡旋などの名目でブローカーに通常1人当り米ドルで2000ドルを支払っている」とし、「一部の脱北女性たちは入国の過程で人身売買など人権蹂躞の被害を受けている」とした。

(2) で見た「10,000-30,000人」あるいは「30万人が人身売買の被害者である」というのはこのこととかかわっているのだろう。2001年の「朝鮮日報」は、「中国・延吉市だけで3万人の北朝鮮脱出者が韓国へ亡命する日を待っている。」<sup>6</sup>と報道しているが、この3万人という数字は、人身売買で利益を得ようとする集団には「6000万ドルのビジネスチャンス」ということになる。

1990年以降、モンゴル国は人身売買の送り出し国になったが、この記事は、受け入れ国にもなったことを示している。1991年の市場経済移行の混乱の中で没落し、被害者になる人だけでなく、資本を蓄積し、ヒトをモノやカネとして扱いさらなる富を築くモンゴル人が一定数生まれている。その中から脱北希望者の弱みに付け込んで、「ビジネスチャンス」を活用する人がでてきても少しもおかしくない。

昨年(2004)の9月、ウランバートルで韓国から帰国した不法入国者Bさんから韓国への不法入国について聞いた。

私はチェコで働いた後、2003年から韓国の仁川で働いていましたが、今年(2005年)になって不法滞在者の取り締まりが厳しくなり、職場で警察の捜索にあい、強制送還されました。韓国行きのビザは、多くの友達からお金を借り、ある組織に5,500ドルを支払い、短期間のビジネス・ビザを購入しました。そのビザには、モンゴルから韓国の国境を越える時まで同行する人がつきます。その人は、マルチビザを持っていて、頻りにモンゴルと韓国を往復している人です。入管で別室に呼ばれた時、その人は、5,000から10,000ドルの見せ金を空港職員に見せて、通過させます。私は、その人の滞るチケット代500ドルを国境を越えた後で渡し、そこで別されました。

この話は、特殊な話ではなく、街で売られている情報誌やテレビのお知らせのコーナーではビザの値段が紹介しているし、ウランバートルで暮らしている人なら、「韓国ビザ」がだいたいこれぐらいで手に入ることを知っている。「韓国ビザ」の値段は脱北のモンゴルルートの2.5倍になる。

#### (5) もう1つのパネルの報告 DVと闘う東アジアの女性のネットワーク

6月21日、北朝鮮の人身売買の報告を聞いた後、モンゴルのDVセンターのナラントヤーが参加するパネルディスカッションDomestic Violence and Women's Movement in East Asia: Moving

<sup>6</sup> 「朝鮮日報」2001年3月1日

towards Regional Networking and Strategies(P1605)を開きに行った。

Park Inn-Hea	Organizer
Han Woo-Seop	Women's Movement to Eradicate DV in South Korea
Keiko Kondo	Women's Movement to Eradicate DV in Japan
Ferenandez Teresa	Women's Movement to Eradicate DV in the Philippines
Wang XingJuan	Women's Movement to Eradicate DV in the China
Purevjav Narantuya	Women's Movement to Eradicate DV in the Mongolia

このパネルは、他のパネル2つ分の3時間の時間枠で、母国語と英語・韓国語訳の報告冊子<sup>7</sup>があるので、そちらを参照されたい。2007年に中国・韓国・フィリピン・モンゴル・日本のネットワークを強化するためのシンポジウムを日本で開催するという。

ナラントヤーの報告で興味深かったことは、社会主義の時代、家庭内暴力は隠蔽されていたということである。当時、女性に対する暴力は、刑法により、男性に対する暴力より厳しい罰が与えられていた。そのため、夫が出世できなくなったり、将来叙勲の対象にならなくなったりすることを恐れて、殴られた妻は我慢したという。確かに、誰もが尊敬できるような人物でないと党员にはなれず、党员となった後は人民の模範として働き、暮らさなければならなかったもので、こういう隠蔽も起こったのだらうと思われる。

また、ナラントヤーによると、教育や労働の現場での男女平等は数値目標を掲げて、眼に見える成果をあげたが、家庭内は外から見えず、遊牧の伝統的な性別役割分業の考え方が残っているため、女性の負担は重いままであったという。例えば、5時に仕事が終わっても、女性は急いで食材を買いに行き、家に帰り、食事の準備をする。男性はくつろいでご飯のできるのを待つということがあったという。

たしかに、当時は中央集権的な政治体制で、家庭の中には父権制が強かった。「社会主義の時代は男女平等」であったということを改めて問い直すことを促してくれたナラントヤーの報告であった。

## (6) NGO"Korea Women's Hot Line"、モンゴルへ

9月、NGO"Korea Women's Hot Line"の代表者たちが、モンゴルのDVセンターを訪問した。この時、DVセンターが人身売買問題に最も熱心に取り組むNGO人権発展センターCHRDを紹介し、"Korea Women's Hot Line"と交流する機会が作られた。このようなつながりが、モンゴルに入ってくる北朝鮮の被害者女性を救うことになっていくだろう。「ビジネスチャンス」をめぐる闇の組織の連携だけでなく、被害者を救済するための女性NGOの連携も始まった。そのことを確認できたことは、非常に意義のあることであった。

## (7) 韓国人と結婚するモンゴル人女性

### ① 国際結婚の増加

1990年以降、先進資本主義国の男性と結婚するモンゴル女性が増えているが、特に韓国人との結婚

<sup>7</sup> Korea Women's Hot Line(2005) "Domestic Violence and the Women's Movement in Asia: Moving Towards Regional Networking and Strategies"

が多い。

「500組中80組が国際結婚」<sup>8</sup>

2004年に500組が国立結婚宮殿で結婚式をあげた内、モンゴル人女性が外国人男性と結婚したケースは80組、最も多いのが韓国人20人、アメリカ人13人、イギリス人・日本人・ドイツ人は8人、中国人・オランダ人・フランス人・インド人が2人である。これに対し、モンゴル人男性が外国人女性と結婚したケースは1年に1、2度と少ない。

クワンナルのモンゴル文化センターのD先生のところには、韓国人男性と結婚し、相談のために訪れる女性たちが多い。

D先生の話

最近、韓国人と結婚するための紹介所が増えている。韓国人男性は年齢が高かったり、再婚であったり、結婚しにくい境遇の人が多く、モンゴル人女性の方は、高学歴の人が多く、韓国ドラマで見るような華やかなソウルの暮らしに憧れてやってくる。モンゴル・タウンで働いている女性は、たいてい韓国人の夫がいて、化粧品やエステに1ヶ月に500ドルくらい使って、贅沢に暮らしている。<sup>9</sup>

表1は、社会福祉省が韓国で働くモンゴル人の学歴を調べたものである。

表1 韓国で働くモンゴル人の学歴 (%)

学歴	男	女	全体
小学校卒	2.8	2.8	2.8
8年制卒	12.7	8.3	10.7
10年制卒	27.2	21.7	24.7
専門高等学校卒	11.8	13.3	12.5
大学中退あるいは卒業	45.5	53.9	49.4

(Нийгмийн хамгаалал, Хөдөлмөрийн яам, Монголын Хүн ам, Хөгжил нийгэмлэг, НУБ-ын Хүн Амын сан (2005), "Монгол иргэдийн гадаадад хөдөлмөр эрхлэлтийн байдал, үр дагавар судалгааны тайлан - ", УБ)

これを見ても、モンゴル人移住者全体で大卒が49.4%を占め、高学歴であることがわかるが、女性の占める割合は53.9%とさらに高いことがわかる。

② 夫婦間の習慣の違い

D先生の話 2005年6月23日聞き取り

実際に、モンゴル人女性が韓国に来て、結婚生活を始めると、いろいろな問題が起こり、家庭内暴力も発生

<sup>8</sup> "Цаг үеийн мэдээ", 2005.8, ソウル

<sup>9</sup> "Цаг үеийн мэдээ", 2005.8, ソウル



しているようです。私のところに相談に来た女性は、夫がほとんど話をしてくれないと言っていました。彼女の韓国人の夫は、教師をしているので、高学歴な人なのですが、家に帰った時に「ただいま」、その後「ご飯」、最後に「寝る」の3回しか話さないのだそうです。

モンゴル人は普通、家で家族同士よく話しますね。生活が貧しくても、暖かい心で支えあう。コートがなくて、寒い思いをしても「将来必ず暖かいコートを買ってあげるよ。」と言うので、その言葉だけで寒さを感じなくなります。

モンゴル人女性も、誰かが無理やり結婚させたわけではなく、自分で納得して結婚したわけだから我慢するしかない。それで、私のところに何度も話しに来るのでしょう。

ウランバートルで暮らしている時よりも、物質的な豊かさを享受できても、モンゴル人女性は国境を越えても存在するDVの問題と隣あわせに生きなければならないのだろうか。

### ③ 韓国人姑とうまくやっっていけないモンゴル人嫁

D先生の話 2005年6月23日聞き取り

韓国人男性と離婚するケースが増えているが、その原因は習慣の違いや夫の暴力だけでなく、義理の両親との関係がうまくいかないことも多いようだ。モンゴルの舅姑は、嫁に対して寛容だ。外国人の嫁は、幼い娘ができたと思って暖かく包み込む。しかし、韓国の姑は、初対面から距離をおき、厳しくつけよとする。特に、外国人の嫁は、他の韓国人に笑われないように厳しく注意するようだ。それに耐えられず、離婚するケースが増えている。

モンゴル人の姑は、独立した子どもたちを自分の思い通りにしようとは思わない。だから、姑の嫉妬はモンゴル人妻にとって非常に窮屈で、場合によっては人格否定に受け止めることもあると思われる。

### ④ 東大門移住女性人権センターとモンゴル人妻の会

タンコゲの米軍基地村のNGOトゥレバンから東大門には移住女性人権センターがあり、DVについて相談に来るモンゴル人女性がいると聞き、訪ねることにした。しかし、今のところ、モンゴル人はセンターに来るよりも、身近な知人や親戚に相談することが多いので、相談者は少ない。そこで、このセンターは、モンゴル人妻の会と連絡をとっている。

モンゴル人妻の会代表のEさんはモンゴルの大学を卒業し、給仕の仕事をしていて、賃金が安いので、知人を頼って韓国に出稼ぎに来た。最初は韓国の言葉も、習慣もわからず、大変だったという。小さな繊維工場で働いていた時、同僚の韓国人男性と結婚した。今は、子どもを育てながら、モンゴル人が集まってくる食堂を運営している。また、「ダライン サルヒ (海風)」というNGOの主要人物でもあり、このNGOには、他にも実業家の会、労働者の会、学生の会がある。

Eさんの話 2005年9月8日

結婚当初は、韓国の家庭料理1つ、作れなかった。嫁として、肩身が狭かった。説明する言葉も知らなかった。ここに来るお客さんの中にも、同じ境遇の人がいます。できるだけ、言葉や習慣に慣れないモンゴル人の悩みを聞き、知っていることを教え、料理の講習会などを開くようにしています。

Eさんの話 2005年9月8日

最近ではWEBサイトを通じて結婚するモンゴル人女性が増えています。つい先日も、父親ぐらいの年齢の人と結婚したという18歳の女性が訪ねて来ました。「いっしょに暮らしても愛情が生まれてこない。しかし、ウランバートルの家族に送金しなければならないので離婚できない。辛いけれども、耐えるしかない」と聞き、とても辛い思いをしました。

こうなると、国際結婚というよりも、身売りや人身売買に近い印象がある。この移住女性人権センターはモンゴルのDVセンターと人身売買問題のCHRDとも協力していくことになった。

## (8) 性労働

### ① トウレバンとDVセンター

ソウルに行ってみたくと思ったもう1つのきっかけは、タンゴケの米軍基地村のNGOトウレバンにはモンゴル人スタッフがいる、ということを知ったからであった。初めは、人身売買などの被害にあつて韓国に来たモンゴル人が、米軍基地村に流れ着いたのだろうかと思っていたが、トウレバンで話を聞いたところ、この基地村で働く性労働者の5割がフィリピン人、4割がロシア人（ロシア語圏の人）で、ロシア語の堪能な人材を募集したところ、モンゴル人女性が応募したということであった。その女性は、一定の役割を果たしていたが、米軍人と結婚し、アメリカへ渡ったということだった。トウレバンにはDVセンターのナラントヤーといっしょに訪問したが、離婚した女性や性労働に関わる女性が、いつかここを訪ねるだろう、と思った彼女は、今後も協力していきたいことを伝えていた。

### ② ソウルで働くモンゴル人性労働者

ソウルで不法滞在の人たちにモンゴル人女性が性産業で働いているのを聞いたことがあるか、と聞いたところ、Bさんは、「僕の知っている限りでは、女の人は住み込みでホテルの掃除係りや食堂で働く人が多い。バーのホステスや売春婦は聞いたことがない。」Aさんは「私も聞いたことがない。ただ、モンゴルで売春している人が向こうへ行ってもすることがあるかもしれない。むしろ、1人で来た女性が、ソウルに頼る知人もなく、職場でも孤立しているような場合、経営者に暴力的な扱いを受けることはあると思う。」D校長先生は、「売春に関わっている人たちは、普通に働いている人たちと日常的に接触することなく暮らしていると思う。私たちのところにも訪ねて来ない。」と答えた。

ソウル在住期間の長い人たちも、まだ、モンゴル人女性の性労働についてあまり知らないのは、住む世界が違うからであろうか。しかし、「朝鮮日報」には2つ記事があった。

ソウル・長安(チャンアン)洞のマッサージ施設で、午前9時から午後6時まで掃除をしているモンゴル人のブーヤ(女性/45)さんも、子供たちが大学を出るまではモンゴルに帰らないつもりだ。1999年と2000年に次々と長女や息子を韓国に連れてきたブーヤさんは、「私はロシアで大学を出たけど仕事がなかった」とし、「仕事はきつけど、子供たちにより多くのチャンスを与えられるなら、いくらでも我慢できる」と語った。<sup>10</sup>

<sup>10</sup> 「朝鮮日報」2003/08/20

次は、簡易売春場所「休憩テル」で7人のモンゴル人女性が摘発されたという記事であるが、長くなるので、最後に引用することにする。この記事は3月に「売買春防止法」が施行され、売春宿の取り締まりが強化された結果、売春婦が風俗産業に移り、そこで売春が行われるようになり、さらにそこにも摘発の手を入れたということを伝えている。

### ③売買春にどうむきあうか。

家畜を繁殖し、育てる遊牧民の研究をしてきた筆者を知る人は、「なぜ、最近、今岡は売春に興味を示すのか」と疑問に思うらしい。初め、筆者も、世界女性大会における韓国の売買春防止法をめぐる議論には参加できなかった。この問題にどう向き合うか、真剣に考えたことがなかったからだ。

しかし、グローバリズムの下、モンゴルは変貌していく。首都ウランバートルでの売買春については、前号「モンゴル国における女性研究の動向と研究紹介」でも述べた。2005年の9月、ウランバートルの移住者が集中する貧困地域を調査している時、そこに外国人の観光客が来るはずがないにもかかわらず、あちこちにホテルの看板を見かけた。地方の遊牧民が家畜を失い、首都に流れこみ、雇用の機会に恵まれず、自分の性を売るケースが増えているのかもしれない。遊牧研究している者も、売買春を視野に入れて研究しなければならないほど、現実に変貌している。

生産手段を所有する農民や遊牧民と違い、生産手段をもたない私たちは、自分の労働を雇用者に売って、賃金を得るしかない。受けた教育や習得した職業能力が高ければ、自分の労働は高く評価され、高い賃金を得ることができるが、そのような教育の機会に恵まれない場合は、3K業種で肉体労働をし、安い賃金を受け取ることになる。肉体労働で高収入をえるためには、極めて危険な仕事、不法な仕事、自分の肉体や性を売ることになるだろう。ということは、売買春は、性労働と呼び、賃金労働の1つとして理解した方がすっきりする。偏見なく、同じ労働者という立場で向き合えるからである。遊牧民が生産手段を失って、性労働に従事することにならないよう、伝統的な力量を発揮して、健やかに、文化的に暮らせる地域社会とは何か？このことを考えて続けていくためにも、生産手段を失った人たちが、首都に移住し、外国に移住していく現状をしっかりと見つめていかなければならないと改めて思った。

#### 「不夜城の休憩テル 衛生は売春宿より深刻」 「朝鮮日報」2005年6月1日

1日、20代のモンゴル人女性7人が警察に摘発された。売春も兼ねた理髪店で働いていた疑いだ。厳しい不況の中、中国、ロシア、モンゴルの女性など国際売春婦の“ハブ”となっているほど、韓国はセックス産業が肥大化している。

3月に「性売買防止法」を公布した政府は、4月から大々的な売春宿の取り締まりに入った。しかし売春宿から逃げ出した女性と資金が「休憩テル(男性専用の休憩所、各種風俗営業と共に売春も行われる)」のような衛生検査も受けていない新種のセックス産業へと流れている。

ソウル・東大門区・チャンハン路。地下鉄5号線のチャンハンピョン駅から長安ローグリーに続く1キロメートル余の通りの両側には「休憩テル」と書かれた40余の看板が並んでいる。裏通りまで含めればこのような店は60カ所におよぶ。

「休憩テル」、「休憩タウン」、「休憩所」から「スポーツマッサージ」まで。名前は様々だが、ほとんどが売春を行う風俗店だ。一時有名だった「長安洞退廃理髪店(女性従業員が理髪と共にマッサージや売春を行う)」が取り締まりを避け、「長安洞休憩テル」に看板を変えた。

近くにある不動産会社の公認仲介士は「ほかの店はダメになっても、休憩テルの商圈は大繁盛」と話した。最近も休憩テル2カ所が新しくオープンし、10カ所が施設を改装した。

A休憩テルの“室長”というある男性は、顧客数について「平日で70～80人、週末は100人」と説明した。人気のある休憩テルは金・土曜日の週末の顧客だけで300～400人におよぶという。休憩テルの数と合わせ大略計算すれば、1日2000

～3000人が長安洞に来てカネを落としていっていることになる。

しかし盛業中の店は休憩テルのみ。近くの刺身専門店のオーナーは、「夜になると四方八方から酒に酔った男たちが集まってきて“事”を終えた後、そっと姿を消す」と話した。この刺身店の近くにある50坪余のチゲ専門店も夕食の時間帯であるにもかかわらず顧客は2組だけだった。

このように長安洞の休憩テルが大繁盛しているのは、警察が今年4月から始めた「売春宿取り締まり」と密接な関連がある。

B休憩テルの女性従業員は自分が「ヨンジュコル出身」だと話す。「顧客が急激に減り、収入を得るために休憩テルで働くことにした」という。京畿道・坡州市の売春街「ヨンジュコル」は、ソウルの売春街「清涼里588」、「彌阿里テキサス」と共に警察の主な取り締まりの対象となっている。

C休憩テルの男性従業員は「最近商売の振るわないルームサロン(高級個室バー)からも、相当数の女性従業員が流入している」とした。売春が行われるルームサロンとカラオケ付きの飲み屋は、最近の不況と政府の企業接待費制限措置で大きな打撃を受け、苦しんでいる。

女性たちが売春の仕事を手を転々とする最大の理由は、ずばりカネだ。売春女性は客1人当たり1時間余をサービスし、5万ウォン程度を受け取る。料金の6割にあたる金額だ。人気のある女性の場合、1日10人以上の客を相手する。

“健全な仕事先”であるファーストフード店やコンビニエンスストアで働く女性従業員の時給は3000ウォン余。セックス産業が奇形的に肥大化した経済環境が生んだ格差だ。

女性らとともにカネも集中している。近くにある不動産会社の職員は、「業主らの新規投資が持続的に行われている」とした。共同出資による施設の大型化も進められている。ひとつの建物を2つの店が使用したり、ひとつの店が2階と3階を使用する大型店も登場している。

東大門区庁の某公務員は「小規模だった風俗店が統合、廃合を経て、中型や大型の休憩テルに変貌している」と説明した。

しかし、これらの休憩テルは衛生や保健の死角にある。休憩テルは誰もが運営できる自由業種にあたる。衛生関連の規制を受ける宿泊業や沐浴場業、理容業にも該当しない。業主らがこぞって“風俗店”の看板を下ろしたのも、取り締まりや規制、監視を避けるためだ。

このため、休憩テルの従業員は保健所で検診を受ける義務がない。ヨンジュコルや清涼里、彌阿里など売春宿の女性従業員は毎週1回検診を受けなければならない。Dスポーツマッサージの女性従業員は「1日10人余の客を相手にしているため、異常があるのが当然」と話した。性病に感染しても仕方ないということだ。